

クラボウグループ発祥の地でDNAを継承する ―新任管理職研修―

1月18～19日に新任管理職研修後期日程（受講生16人）をクラボウグループ発祥の地である倉敷にて実施しました。

初日は旧倉敷本社・工場である倉敷アイビースクエアの歴史を学んだ上で、クラボウならびに大原家ゆかりの地を巡るフィールドワークを行いました。

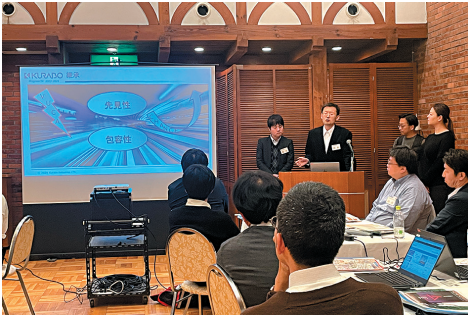
クラボウの歴史を伝え、登録有形文化財に指定されている「倉紡記念館」、重要文化財に指定されている旧大原家住宅「語らい座」、そして2代目社長大原孫三郎が支援した画家児島虎次郎を記念して設立した「大原美術館」などを巡り、創業時から受け継がれてきたDNA



▲旧大原邸でDNAに触れる

Aである「同心戮力」^{（りくりょく）}「謙受」^{（けんじゅ）}「やる可し、大いにやる可し」の精神に触れました。

2日目はフィールドワークを通じて学び・気づいたことをグループでまとめた上で、「DNAを継承し、今後、管理職として何を成し遂げたいか」を発表しました。管理職一人一人の非常に熱のこもった発表がとても印象的でした。その後、部下育成について学び、管理職としての自己開発計画を検討し、2日間の濃密な新任管理職研修を終えました。



▲DNAをどう継承するか（グループ発表）

受講者の所感

「私は圧倒的に見てきた」

技術研究所 応用開発グループ

宗徳 皓太

「私は圧倒的に見てきたので、最後の最後は言語化できない処理を経てボンと答えが出る」

今回の研修で一番心に残った言葉です。大原美術館でのワークショップをご担当いただきました柳沢秀行さん（学芸統括）に、「正解のない芸術の世界で、どのように支援する芸術家を選び、判断するのか」という質問をしたら、こう回答されました。

作品をよく見ることは当然として、作者のこれまでの経歴や将来性、世の中の流れなど、さまざまな情報を組み合わせて判断するのですが、最後に働くのは理屈ではなく直感なのだ。「私は圧倒的に見てきた」と自信を持って言えるのが本物のプロなのだと感じました。

管理職になって8カ月、正解のない業務の中で、物事を選び、判断する際に直感が働かず、

日々迷ってばかりなのは、見てきた量が足りない証拠。職位が上がって関わる人や情報が増えたのは成長のチャンスと捉え、「私は圧倒的に見てきた」と自信を持って言えるプロになりました。と思います。



▲管理職としての想いを伝える（発表：宗徳さん）

受講生が挑戦の歴史であるクラボウグループのDNAを継承していくことの重要性を、あらためて感じられた2日間となりました。と思います。

最後にこの場を借りて、研修にご協力いただきました倉敷アイビースクエアの皆さま、大原美術館の皆さまにお礼を申し上げます。

（人材開発課 谷畑 義則 記）